

鋭く感じ、柔らかに考える国際総合誌

季刊  $\Lambda\Sigma\text{TEION}$

1992年7月1日発行 通巻25号  
季刊(年4回—1・4・7・10月発行)  
ISSN0913-0500

# アステイオン

巻頭百五十枚

## アメリカニズムの終焉

佐伯啓思

【特集】 知識人の再出発

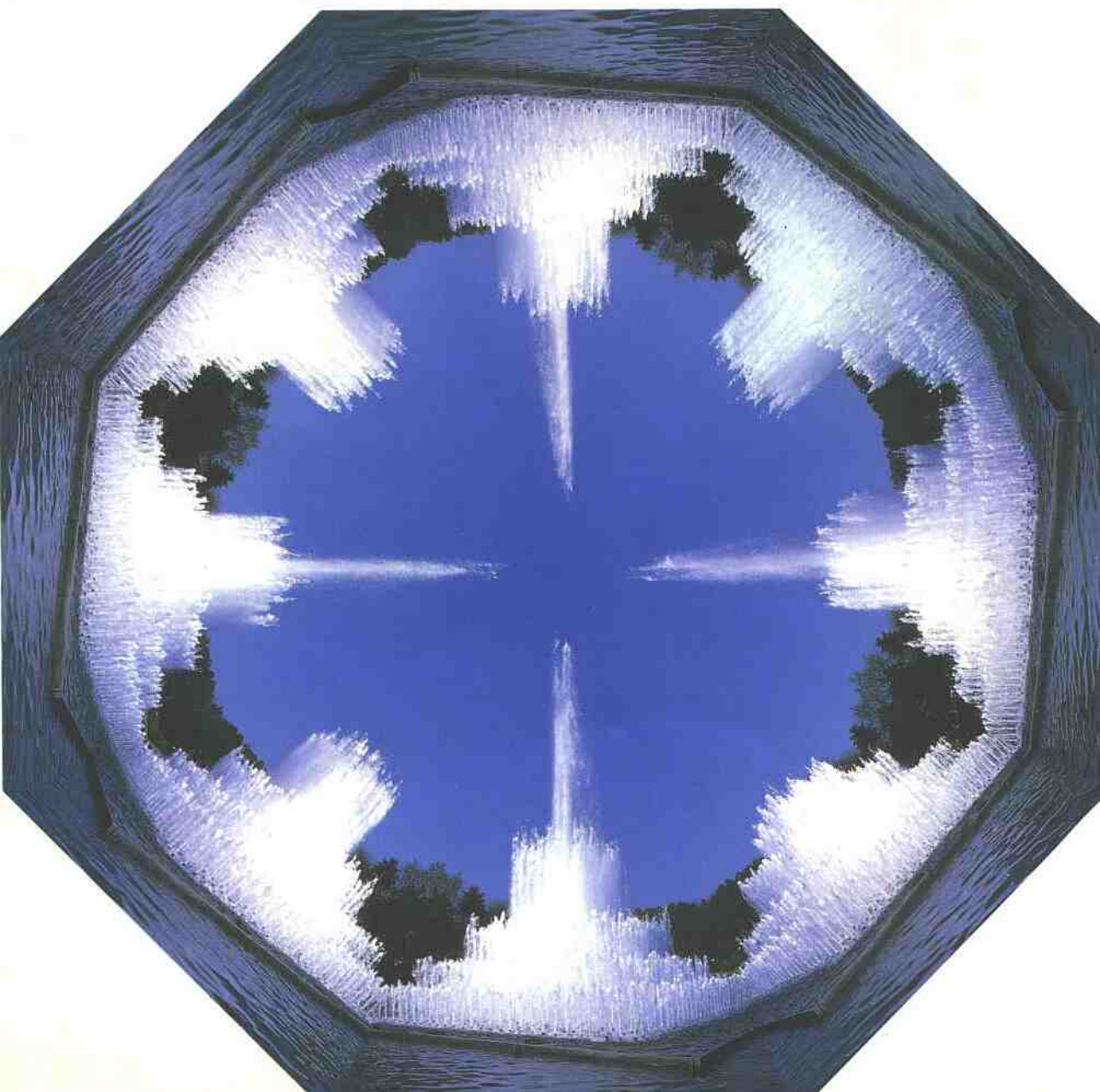
ダニエル・ベル、袴田茂樹、盛田常夫

【評伝】 衆人皆酔う、我独り醒む——副島種臣論ノオト

石川九揚

No. 25

1992 Summer



## 哲学者と文学者の狭間で

特集

## 知識人の再出発

都市ブダペスト黄金時代は傑出した知識人層を形成した。そしてナチズム、スターリン時代など動乱の時代を越え、中欧の知識人は、かに行動してきたか。

## 盛田常夫

## 都市ブダペストと知識人の形成

一九世紀から二〇世紀への転換期において、ハンガリーでは知識人が一つの社会階層として形成された。一八四八年の対オーストリア独立革命が失敗した後、一八六七年、ハンガリーはオーストリアとの従属的な同盟関係を結ぶことで(オーストリア「ハンガリー二重帝国」、東の帝国としての面目を保つことになった。このいわゆる「歴史的和解」を契機に、民族

同化政策(マジヤール民族化)が進められた。その結果、首都ブダペストの人口が急速に増加し、二〇世紀初めにはヨーロッパ有数の都市に発展していった。

異民族の同化、とりわけユダヤ人のマジヤール化は、文化的混交のみならず、経済的な発展をもたらすものになった。血の交わりが言葉の交わりとなり、類稀なるコスモポリタン都市が一九世紀末のヨーロッパの辺境に現れた。このブダペストの都市の喧噪が新しい社会階級、階層を生み出すことになった。

ハンガリー出身の歴史家ルカーチ・ジョンは「ブダペスト…一九〇〇年」において、「一九〇〇年世代」という概念を用いている。彼の定義によれば、一八七五年から一九〇五年のあいだに生まれた世代を指す。ルカーチがとくにこの時期を選ぶ理由の一つに、五人のノーベル賞受賞者の出生がこの時期に重なることがある。ノーベル賞は一つの目安にすぎない。物理・数学のノイマン・ジョン(ヤーノシユ)、社会学のマンハイム・カール(カロイ)、経済人類学のポラーニイ・カール(カ

ーロイ)、作曲家のバルトック・ペーラ、哲学のルカーチ・ジョルジュなどの錚々たる人物も、この世代を代表する。

確かに、この時期のハンガリー、いやブダペストは後に世界で活躍する珠玉の人物を育んだ。この時代こそ、近代ハンガリー国家の興隆と都市ブダペストの黄金時代なのである。

とくにブダペストでは教育制度が整備され、オーストリア、ドイツの教育制度が移植された。二〇世紀初頭の都市ブダペストは、民族の高揚の意気をもつ有能な教師を育てた。当時のギムナジウムは世界的な水準にあったといわれるが、民族的な高揚の分だけ、抜きん出たものがあつた。ノイマンも、彼より一十年前で後にノーベル物理学賞を受賞したヴィグナー・ユージン(イエヌー)も、ブダペストのギムナジウムに通つた。

マルクス主義理論家となつたルカーチ・ジョルジュ(一八八五—一九七二)も、物理・数学の分野で天才的な業績を残したノイマン・ヤーノシユ(一九〇三—一九五七)も、ユダヤ人銀行家の家に育つた。双方の家族とも、民族同化政策にそつて、爵位を買い取つた。フォン・ノイマンと称したのも、フォン・ルカーチと称したのも、こうしたユダヤ人実業家が社会的地位を獲得するための手段であつた。しかし、同じ「一九〇〇年世代」に属するとはい

え、すでに世紀の転換点で青春時代を迎え、確実に衰退の道を辿るハプスブルク帝国と、それに乘じてうたかたの繁栄を貪るブダペストに、時代の危機を感じとり、新しい人間と社会のあり方に関心を寄せたルカーチと、繁栄のまっただ中に生を受け、何不自由なく学校に通い始めた少年ノイマンとは、その生きざまが似通うはずはなかつた。

「一九〇〇年世代」はやがて、大きな歴史のうねりのなかで、世界に散らばっていく。第一次世界大戦はハプスブルク家の支配を終わらせた。それはまたハンガリー王国の崩壊でもあつた。戦勝国の領土割譲要求に抗せず臨時政府が自壊し、一九一九年三月、「タナーチ(ハンガリー・ソヴィエト)共和国」が樹立された。ルカーチは教育人民委員代理(教育・文化副大臣)に就き、自らの理想の実現を目指そうとした。当時の知識人の多くが、この共和国の樹立に協力した。バルトックもポラーニイも、その一員であつた。

この時期、ノイマン家は社会主義化による資本家追及を恐れて、ウィーンに逃れていた。しかし、タナーチ共和国が一三三日で崩壊した後、再びブダペストに戻つたが、逆にルカーチ、ポラーニイ、バルトック等は、白色テロルから逃れるべく、ウィーンに立つた。

かくして、ブダペスト「一九〇〇年世代」

はタナーチ共和国の崩壊とともに、世界に散つた。それはハンガリーにとつて悲劇であつたが、ブダペストの黄金時代の傑出した人物と作品が世界に伝播する契機となつた。「一九〇〇年世代」にとつてのもう一つの悲劇は、ナチスの台頭であつた。一九四一—四二年はユダヤ系知識人の流出のピークである。この流出によつて、「一九〇〇年世代」はハンガリーから一掃されてしまつた。

二〇世紀初めのヨーロッパの辺境に突如として現れたブダペスト知識人は、社会主義革命の失敗とナチズムによつて、跡形もなく消え去つた。あたかも蜃気楼のごとく。今から振り返れば、「一九〇〇年」はブダペストの繁栄の頂点であつた。あらゆるものが輝いていた。その輝きが、神の申し子たちを産み落とした。この歴史的瞬間こそ、ハンガリーの奇跡、いやブダペストの奇跡なのである。

1 John Lukacs, *Budapest: 1900 - A Historical Portrait of a City and Its Culture*, Weiden-

feld & Nicolson, 1988 Chapter 5, 邦訳 早稲

田みか訳「ブダペストの世紀末」白水社、一九九一年。なお、以下本稿の人名は姓名の順である。

2 ノーベル物理学賞のガボール・デーネシユは一九〇〇年生まれである。

3 ダニエル・ベル「最後のマルクストーゲオルク・ルカーチ」(本誌23号、一九九二年冬季号)を参照

4 ノイマンの少年期の記録、アメリカ時代の書簡集がハンガリーで発刊されている。(Nemunn

Janos és A "Magyar Tihók" a Dokumentumok

Tükreben, Országos Műszaki Információ

Központ és Könyvtár, Budapest, 1987).

## 戦後知識人の試練

一九四四年より攻勢に転じたソ連軍は、ドイツの支配からハンガリーを解放した。解放と同時に、ソ連共産党の命を受けたハンガリー共産党幹部が戻ってきた。すでにハンガリー共産党の創設者で、タナーチ共和国の指導者クン・ベーラはスターリンの犠牲となっていた。タナーチ共和国の人民委員の経験のあるラーコシ・マーチャーシュはソ連共産党の厚い信頼と政治的手腕で、ハンガリーの小スターリンの位置に就いた。同じくタナーチ共和国の樹立に参加し、西側に亡命していたレヴアイ・ヨージェフ、ウイーンからモスクワに亡命したルカーチなどが、戦後の共産党の活動を指導することになった。

スターリンのソ連で『歴史と階級意識』の自己判断をおこない、自らの思想と行動の矛盾のなかにあったルカーチには、新しい創造力が失われていたと見るのが妥当である。戦

後のハンガリーにおいて、一部の哲学の学徒

を除き、ルカーチの思想が影響をもつことはなかった。実際、戦後の混乱期から社会民主

党と共産党の合同、社会主義権力の確立、そ

れに続く一連の粛正の嵐は、正常な精神活動の場を提供しなかった。この時期、マルクス

主義文献の翻訳、紹介が積極的におこなわれ

たが、それ以上の創造的な仕事は見あたらな

い。四八年から五三年までの時期は、ハンガ

リーにとつてもつとも不毛な時代なのである。

一九五三年のスターリンの死は、戦後知識

人に新たな活動の場を与えることになった。

当時、統計局長官であったピーター・ジョ

ルジュ(一九〇三—一九六九)はいち早く、市場

経済の確立を唱え、若い経済学者に大きな影

響を与えた。当時、共産党の機関紙編集局の

記者であったコルナイ・ヤーノシュ(一九二九—

は、五五年に編集局から追放されたのを機会

に、創設間もない経済研究所(後のアカデミー経

済研究所)に移った。ユダヤ人弁護士を父にも

つコルナイは父を強制収容所で、兄もソ連と

の戦線で失っている。自らも強制収容所から

脱走して生き残った。その経験がマルクス主

義への道へと駆り立てた。

コルナイは一九五六年に博士候補論文「過

度集権制と物質的利害関心の若干の問題」を

書き上げた。ソ連型の集権的経済管理を痛烈

に批判したものであった。学位審査は大きな

反響を呼んだ。審査委員長はピーター・ジョ

ルジュであった。しかし、学位審査から一カ

月後、「ハンガリー動乱」が勃発した。彼はピ

ーター長官の部屋で、新しい政府の経済政策

案を作成する仕事にあたったが、混乱が激し

くなるなかその仕事を止めてしまった。以後、

コルナイは政治と完全に手を切った。

翌年、学位論文はハンガリー語で出版され

たが、その著書にたいするイデオロギー的な

批判は五八年から始まり、経済研究所から追

放されるにいたった。動乱の参加者にたいす

る厳しい追及がおこなわれていた時期である。

こうした危機的な状況を救うために、五九年

にコルナイの著書の英訳がオックスフォード

大学から出版された。ヒックス教授にたいし

て、ハンガリー人亡命者が進言した結果であ

った。

コルナイはその後、数理経済学に転進し、

数理計画の可能性を探った。その数理経済学

にも見切りをつけ、自らの経済学の出発点を

築こうとした著作が『反均衡の経済学』であ

る。その後、一九八〇年には『不足の経済学』

を上梓し、社会主義経済の分析に、新たなパ

ラダイムを築いた。一九八六年よりハーバ

ード大学経済学部の正教授に迎えられた。コ

の経済学者がいる。コルナイと同じ一九二九年に生まれたタルドシュ・マルトンもまた、ドイツ系ユダヤ人の家庭に生まれた。コルナイと同様、ドイツ帝国学校に学び終戦を迎えた。タルドシュの人生にとって、もつとも大きな転機は戦後間もなくやってきた。ハンガリー全国学生連合の書記として活動していたタルドシュはレニングラード大学へ留学する機会を与えられた。皮肉なことに、ソ連への留学（一九四八―五〇）はソ連型社会主義の限界を思い知らせた。ハンガリーよりも貧しい現状を目の当たりにした彼は、理念と現実との深く大きな格差に驚くばかりであった。ソ連型社会主義が失敗するというタルドシュの確信は、この時期に獲得された。

ハンガリーに戻り、彼もまたピーター・ジョルジュに師事した。その副産物として、五年にピーターの娘を妻に迎えた。五六年、国家計画庁で長期経済計画の仕事に従事していたタルドシュは、一〇月の動乱に際して、計画庁内部に「革命委員会」を組織した。動乱の後、これを理由に計画庁を追放され、景気循環・市場経済研究所に左遷された。以後、彼は反体制の経済学者として、頑固なまでの意思を貫いてきた。

彼を再び陽の当たる場所に戻したのは、後に触れるニエルシュ・レジュニアであった。タ

ルドシュとニエルシュは一九八〇年代の経済改革と八六―八八年の政治変革に、二人三脚のチームを組んだ。この共同戦線はニエルシュが政治局員にカムバックするまで続いた。一九九〇年、複数政党制の導入とともに、タルドシュは自由民主連合の創設に加わった。

1 コルナイの自伝については、「わが思想と経済学―コルナイ・ヤーノシュに聞く」（『経済評論』一九九〇年、一〇月―十二月号）を参照のこと。

2 J. Komai, *Anti-Equilibrium*, North-Holland, 1971（邦訳「反均衡の経済学」日本経済新聞社、一九七五年）。

## 六八年チエコ軍事介入のインパクト

「ハンガリー動乱」は一九一九年のタナーチ共和国崩壊に匹敵する歴史的事件であった。

「動乱」参加者の追及は厳しく、暴力行為の実行者には死刑を含めた厳しい処罰が待ち受けていた。現ハンガリー大統領グンツ・アルパード（一九三二―）も、ナジ首相側近の連座で終身刑の判決を受けたが、六三年に恩赦で出獄した。以後、作家、翻訳家として生計を立ててきた。同様の経験をもつ知識人は多い。

動乱を契機に多くの人々がハンガリーを去った。とくに未来を求める若者が脱兎のごとく逃げた。現インディアナ大学教授のポール・

マラーは、当時二十歳の青年であった。ブダペストから北へ線路沿いに歩き、途中、四人列車にもぐり込み、国境線を一目散に逃げた。ウィーンからアメリカ行きは亡命第一号機に乗ってフロリダに辿り着いた。動乱が治まって間もない一月一三日のことである。

マラー教授は今、OECDの中・東欧地域の市場経済化研究のキー・マンとして、活躍している。マラー教授のようにアメリカで大学を終え、アメリカに研究者としての職を得たハンガリー人は多い。動乱の時期には、まだ新しい戦後世代の知識人層は形成されていなかった。だから、既成の知識人たちの頭脳流出させた一九一九年と違い、動乱はハンガリーの若者を世界に散らばらせた。これらの若者たちが三〇年の歳月を経て、実業家あるいは学者として新しいハンガリーの国際社会への復帰に手を貸している。

「動乱」以後、戦後知識人を大きく動かす事件はなかったが、強いてあげれば、チエコスロバキアにたいするソ連の介入（六八年）である。当時、経済改革を推進していたハンガリーはチエコスロバキアの改革に共感を寄せていた。ただし、両国のあいだには本質的な違いがあった。五六年の「動乱」を経験しているハンガリーは改革の政治的な含意を議論せず、もっぱら経済メカニズムの改善を旗印に

した。これにたいして、チェコスロバキアは政治改革に突き進んでしまった。当時、カーダール社会主義労働者党書記長は、ソ連にたいしては介入を控えるように、地方ドブチェクにたいしては改革のトーンを押さえるように仲介の労をとっていた。しかし、その甲斐もなく軍事介入となつてしまった。

ハンガリーの大方の知識人は黙りを決め込んだ。カーダール型政治は知識人の行動様式まで染み込んでいたし、動乱の傷が癒されていないこともあつた。それに異議を唱えたのが、ルカーチの弟子たちであつた。

社会哲学のヘラー・アークネシュ(一九二八―)、社会学のマルクシュ・ジョルジュ(一九二四―)、ヘゲドウシュ・アンドラーシュ(一九二二―)等は、批判の言動をとつた。彼らは、ブダペスト学派と称される集団を形成していた。いわゆるマルクス・ルネッサンスのハンガリー学派であつたが、軍事介入は、もはやシステム「の歪み」が問題なのではなく、「システムそれ自体」が問題であることを確信させた。

ブダペスト学派の人々はチェコスロバキアの反体制勢力と提携しつつ、ハンガリーの党の内部から党を批判していった。「チェコ軍事介入」以後、ソ連・東欧圏は急速に保守化し、ブレジネフ・ドクトリンがイデオロギー世界

にまで及んできた。一九七三年、ハンガリー社会主義労働者党はこれらブダペスト学派の人々を党から除名し、公職追放する決定をおこなつた。ヘラーとマルクシュはオーストラリアへ新しい仕事場を求めて去つていった。現在、マルクシュはシドニー大学の、ヘラーはニューヨークのユダヤ人の寄付で創設されたニュー・スクール(新社会科学大学)の教授である。

同じ時期、ハンガリー科学アカデミー哲学研究所の若い研究員で、はやりルカーチの弟子であつたキシユ・ヤーノシュ(一九四三―)も、反マルクス主義の言動で公職を追放され、翻訳に従事することになった。苦節一七年、複数政党制導入の後、キシユは自由民主連合の初代党首に選ばれた。

七三年から七七年まで、ハンガリーではこうしたイデオロギー的な締め付けが強まつた。作家で社会学者のコンラッド・ジョルジュ(一九三三―)も自由業を余儀なくされた。彼が社会学者セレーニイ・イヴァン(一九三八―)と共同で書き下ろした『知識人と権力』の草稿が家宅捜索に遭い、以後、著作物の公表禁止の処分を受けることになった。セレーニイはその後アメリカに渡り、ウイスコンシン大学教授を経て、現在カリフォルニア大学教授を務める。ハンガリーに残つたコンラッドは、一

九九〇年に国際ペンクラブ会長に選出された。自由民主連合の全国執行委員でもある。

かくして、六八年チェコ軍事介入事件は哲学、社会学を中心とする知識人を反体制行動へと駆り立てた。これらの人々と「動乱」から生き延びた知識人たちが、サミスタートの執筆者、編集者として陰の道を歩みながら、新しい時代に備えていった。

多くの経済学者に重要なアイデアを与え、彼らを育てたピーター・ジョルジュもまた、ソ連のチェコ軍事介入に激しく抗議した。その後、彼は自殺したと伝えられている。

1 ヘゲドウシュはハンガリーのスターリン時代に党の中央委員を務め、動乱直前まで一時、首相の地位にあつた。

2 George Konrad and Ivan Szelényi, *The Intellectuals on the Road to Class Power*, The Harvester Press Ltd., 1979 (邦訳『知識人と権力』水曜社、一九八六年)。

3 「一九〇〇年代」のピーターは、四八年から六九年まで中央統計局長官を務めた。

## カーダール時代と知識人

五六年以後、カーダール(一九二二―一九八九)がハンガリー社会主義労働者党の実権を握つた。当初はソ連からの強い圧力で、動乱参加

者の厳しい追及をおこなったが、フルシチョフの平和共存路線への転換を契機に、国民融和の政策を展開することになった。

一九六二年、それまで一介の中央委員であったニエルシュ・レジュエ（一九三三）が、中央委員会書記に抜擢された。たまたま、社会民主党出身の書記が解任され、その後を埋めるために同じ社会民主党出身者として、彼が選ばれたにすぎなかった。しかし、この人選がハンガリーの経済改革の出発点になった。

社会民主党員を父にもつニエルシュは印刷工時代に社会民主党に入党した。戦後、共産党との合同がおこなわれた後、彼は農業分野の経済管理の任務を請け負った。当時、彼もまた、この分野の市場化についてピーター・ジョルジュに教えを乞うている。一九四九年のことである。その後、独学で経済学を学び、カール・マルクス経済大学にも通った。

中央委員会書記に任命されたニエルシュは数名の経済学者と私的な集まりをもった。そのなかには、ボグナール・ヨージェフ（一九一七―）とチコシユ・ナジ・ペーラ（一九二五―）がいた。チコシユは、戦前戦後を通じて、常に経済官僚のトップにいた。党には属さなかった（政治的な理由から所属できなかった）が、一九五七年から実に二七年ものあいだ価格庁長官を務め、現在もなおハンガリー経済学会会長

にある。ボグナールはといえば、小地主党の国会議員ということで、スターリン時代を含め、常に陽の当たるポストを占めてきた。

やや胡散臭い経験をもつ彼らであるが、官庁エコノミストや党派を超えたエコノミストの能力を利用することで、経済改革が準備された。ピーター・ジョルジュも参加していた。この私的な集まりが党の公的な組織に格上げされたのが、一九六四年である。以後、ハンガリーの経済学者を結集した作業が、ニエルシュの指導のもとに進められ、それが六八年経済改革となつて実現した。

一九七三年から激しくなつたハンガリー改革への批判をかわすため、カーダールは七四年にニエルシュの中央委員会書記の職を解き、さらに七五年には政治局員としての職も解いた。ニエルシュは科学アカデミー経済研究所長に転出した。この所長時代、ニエルシュは反体制の経済学者として不遇の地位にあつたタルドシュや、同じく経済大学で冷や飯を食わされていたエルドゥーシュ・ティボール（一九二八―）を、経済研究所に招聘した。

ニエルシュは経済研究所に改革派の経済学者を集めることで、新たな改革の可能性を探った。同じ研究所の若手の急進派経済学者でソ連・東欧の景気循環をテーマにしていたパウエル・タマーシュ（一九四六―、現フランクフ

ルト大学教授）、大蔵省金融経済研究所で経済メカニズムの批判的分析をおこなつてきたアンタル・ラーズロー（一九四三―）、アントルとともに改革推進のリーダーとなつたレンジェル・ラーズロー（一九五〇―）、ボクロシユ・ライオシュ（一九五四―）等は、ニエルシュやタルドシュとともに改革を促す政治行動に出た。ポジユガイがイニシアティブをとつて進めた「転機と改革」と題する改革宣言文書の作成がそれである。一九八六年の秋のことであつた。

ニエルシュが改革派経済学者の求心力であつたとすれば、ポジユガイ・イムレ（一九三三―）は文学者、メディアの知識人たちの求心力であつた。彼は大学の学業を終えた後、社会主義労働者党の専従活動家として地方に在勤した。その傍ら、科学アカデミーの通信大学院生として勉学に勤しみ、六九年に博士候補の学位を取得した。「民主主義と政治体制の発展方向」と題する論文は、科学アカデミー図書館の公開禁止文献に指定された。にもかかわらず、この後ブダペストの党本部の広報部課長に引き上げられた。

しかし、部内でのコンフリクトのために、「社会評論」編集次長に配置替えされた（一九七二）。この配置替えは自由な思考を信条とするポジユガイにとつて幸いした。「社会評論」は党の機関雑誌の一つではあつたが、自由な



評論が可能だった。ポジュカイはこの機関雑誌の編集を通して、数多くの人文系の知識人と知己を得た。ハンガリーの近現代の歴史学を代表するベレンド・T・イヴァン(一九三〇)やラーンキ・ジョルジュ(一九三〇—一九八

八)はこの雑誌の常連執筆者であった。ブダペスト大学の政治学助手をしていたビハリ・ミハイ(一九四二)に、ポジュカイは編集の協力を依頼した。映画監督ヤンチョー・ミクロシュ(一九二二)やコーシヤ・フェレンツ(一九三七)と知り合ったのもこの頃である。詩人のチョオリ・シャンドール(一九三〇)とは学生時代からの友人であった。文学史のビロー・ソルタン(一九四二)も、ポジュカイにシンパシーを寄せていた。このうち、ビハリ、コーシヤ、チョオリ、ビローは、ポジュカイのその後の政治生活にとって、重要な役割を演じていく。

一九七六年から八二年まで、ポジュカイは文化・教育大臣を務めたが、八二年に「愛国人民戦線書記長」の閑職に追いやられた。「人民戦線」とは名ばかりで、選挙の際の立候補受付が主な機能であった。だが、ポジュカイはこの機関の役割を逆手にとって、八六年に「転機と改革」と題する経済・政治改革文書の作成を、大蔵省金融経済研究所のアンタルらに頼み、多数の知識人を巻き込んだ討論集会

を連続的に開いた。ポジュカイはタルドシュ、ニエルシュと組んで、この文書を中心に改革派の人脈を作ることを行なったのである。

これ以後、ハンガリーの政治運動が急展開をみせ、ポジュカイ、コーシヤ、ビハリ、ビローらを中心とする文人派は、「ハンガリー民主フォーラム」創設の基礎となった。「ラキテレク集会」(八七年九月)を開いたのにたいし、タルドシュ、ニエルシュらの経済学者は、「新三月戦線」(八七年二月)を結成した。興味深いことに、ラキテレクに集った作家、詩人、歴史家、映画人ほか一八一名のなかに、現首相のアンタル・ヨージェフの名はない。

ポジュカイはまた映画審査委員会の長として、一九八七年、コーシヤ監督が五六年動乱を扱った問題作「いま一人の人」の上映を許可した。これが五六年問題のタブーを打ち破る大きな出発点になった。コーシヤは六七年に「一万の太陽」でカンヌ最優秀監督賞を受賞、「楢山節考」のハンガリー版の「どか雪」、反核をテーマにした「ゲルニカ」などの作品で社会派監督として知られている。「コンフィデンス」、「メフィスト」のサポー・イシュトヴァン監督(一九三八)と同じ、オブジェククト・スタジオの責任者である。

八八年三月、「新三月戦線」と「ラキテレク集会」の双方に参加していたレンジェル、ビ

ハリ、ビローら四名が反党活動を理由に社会主義労働者党を除名された。明らかに、ニエルシュとポジュカイにたいする警告であった。しかし、事態は急展開し、その五月の党全国協議会でニエルシュとポジュカイが政治局員に任命され、カーダールは書記長の座を降りた。

### 知識人たちの再出発

カーダール引退とともに、ハンガリーでは新しい時代への移行期に入った。改革派経済学者は再び政府に入った。カーダールの後を継いだグロース書記長(首相兼任)は、政府内に六八年改革に匹敵する経済改革委員会を設けることを約束し、政府の政策立案のスピードが加速された。こうした約束を受けて、批判派経済学者のアンタル・ラースローは閣僚会議の首席経済顧問として、彼の片腕のシュラーニイ・ジョルジュ(一九五四)とともに、メジェシ(一九四二)副首相を補佐することになった。ポクロシュは国立銀行に戻り、資本市場導入の責任者となった。

八八年一月、新たに首相に任命されたネーメット・ミクロシュ(一九四七)は経済大学のエリート学科(国民経済計画学科)卒業後、計画庁を経て、党本部に入った。八八年から



一年間で、書記局、政治局、首相と三段階特進のルートを歩んだ。彼の兄弟子にあたるケメネシュ(一九四〇)を計画庁長官に据え、メジェシの同僚でやはり経済大学の出身のペーケシ・ラーズロ(一九四二)を大蔵大臣に据えた。旧体制最後の政府となったネーメツト内閣にたいする評価は今も高い。

一九九〇年春の自由選挙は知識人の生活を一挙に変えることになった。改革派経済学者や社会学者、哲学者は自由民主連合の候補として、ポジュガイ、コーシヤは社会党、チョオリ、ピーローらの文人はハンガリー民主フォーラムに留まつて選挙戦を闘うことになった。以後、ハンガリーの知識人には暑い政治の季節がめぐつてきた。

選挙戦に勝利した民主フォーラムは大蔵大臣、対外経済関係大臣などの主要な経済閣僚ポストを無党派の学者に求めざるをえなかった。発展途上国問題の専門家のカーダール・ペーラ(一九三四)は対外経済相に収まった。閣僚会議経済顧問委員会にいたシュラーニイはIMF出向の経験を買われて国立銀行総裁に任命された。社会党のボクロシユはブダペスト証券取引所初代会頭に選ばれ、さらに九年ブダペスト銀行頭取に就いた。

ハンガリーテレビ会長には社会学者のハンキシユ・エレミール(一九二八)が、ハンガリー

ラジオ会長には同じく社会学者のゴンバル・チャバ(一九三九)が任命された。

一方、旧体制最後の首相となったネーメツトは政治手腕を買われて、欧州復興開発銀行副総裁に就任した。副首相だったメジェシはフランスとの合併銀行の副頭取に就任した。ネーメツトに乞われて計画庁長官を務めていたケメネシュは、新政府の誘いを断つて古巣の大学へ戻った。ハンガリー科学アカデミー総裁だったベレンドは任期切れを契機に、カリフォルニア大学教授としてハンガリーを出た。

知識人にとつて、組織人として行動することとは大きな矛盾をひき起こす。人々を適材適所に配置し、政策を立案し、交渉する能力は知識人の要件ではない。その矛盾はすでにいたるところに噴出している。総選挙が過ぎて二年足らず、九一年暮れ、自由民主連合党首のキシユと国会議員団長のペトウー・イヴァン(歴史家、一九四六)が辞任した。自由民主連合の知識人を代表する政治家だったが、台頭する若手の政治プロたちとの軋轢で、政治の一線から身を引いた。ペトウーに代わってタルドシユが議員団長を引き受けた。

ポジュガイは新たな党を作るべく、社会党を離れた。「ラキテレク集会」からポジュガイとともにあつたピーロー・ゾルタンも、ハンガ

リー民主フォーラムを去り、ポジュガイに合流した。ハンガリー政治学会会長に選出されたビハリは、ポジュガイのアドヴァイザーとして残っている。

やはり九一年末、新中央銀行法施行の折、自由民主連合との政治関係を理由に、アンタル首相はシュラーニイ中央銀行総裁を切り捨てた。これといったエコノミストを抱えていないハンガリー民主フォーラムにとつて、苦渋の決断であつた。

それぞれの政党が内部の対立と分裂に悩み、知識人もまたさまざまな去就に揺れている。常に潔癖であろうとする哲学者とフアンタジリーに生きる文学者との狭間にあつて、ハンガリーでは経済学者は常に現実主義者であり、プラグマティストであつた。一九九四年の総選挙を前に、「政治と知識人」のテーマは尽きることがない。



もりた・つねお

野村総合研究所研究顧問、ブダペスト経済大学客員教授(比較経済体制論)。一九四七年、富山県生れ。一橋大学大学院博士課程修了。法政大学教授等を経て現職。著書に「ハンガリー改革史」など。